JRCU
JR東海労

東京地区分会情報

2011年5月10日
第93号
発行責任者 佐藤 雅巳

新横浜駅 32歳青年の死 私たちはどれほど無力なのか

1月24日未明、新横浜駅では「乗務員駅還流」で改札業務を担当していた32歳の若者（ユニオン組合員）が、休養室で仮眠中に息をひきとった。この日朝、駅舎内管理者の配置などにただならぬ雰囲気を感じていた営業第二の社員は、その後管理者から一人の社員の突然死の知らせを受けたが、死因その他についてはその時点では不明ということであった。直後、ユニオン掲示板には分会長名のごく短い『おくやみ』が、それまでの「革マル批判」文書などすべてをはがして１枚のみ張り出されたが、やはり死因などについては一切触れられていなかった。

職場での仮眠中に、32歳というあまりに若い社員の突然死に誰もが驚き、そんな事態の急変に何らかの応急の手立てはなかったものかと関心を集めたが、しかしその後ユニオンの「労組の原点としての世話役活動からの育児支援」（２月24日付）が一度きり掲示されただけで、まして若手社員が中心となって毎月数十ページにもわたって編集される駅内誌『NEW-SIDE-BEACH』でも、ついぞ彼の件について触れられることはなかった。

彼は新幹線の車掌と運転士の乗務経験を経て一昨年12月に新横浜に「駅還流」として配属され、若手でありながら豊富な知識と経験で旅客案内や後輩の育成・指導などに当たっていた。業務の自主活動でも積極的な役割を果たし、所内『ＴＩＣ賞』では上位を占めていた。そんな明朗闊達な若者の突然死は、私たちにとってもあまりに衝撃であった。休養室には吐血の跡があったとも、また体調不良のため病院検査の結果待ちであったとも伝えられている。もしうわさ通りに急性の心筋梗塞であったとするなら、事前の何らかの対応や応急措置次第では彼の死は防ぐことができていたかもしれない。あるいは職場で働く私たちに何らかの心の準備や対応の仕方にも学ぶべきものがあったかもしれない。しかし、会社側のその後の対応は基本的に「何もなし」であった。

私たち新横営業第二の事務所（休養室）は出改札や輸送担当者らとは異なる別棟に設置されており、駅舎内休養室の配置や設備などについては分からない。また第二でも日ごろの健康管理の注意喚起が管理者から行われることがあるが、それを具体的に推し進める職場改善の姿勢などは決して十分とはいえない。ちなみに『NEW-SIDE-EACH』誌でも健康管理に関するページが毎号割かれてはいるが、その姿勢はあまりに現状肯定的で、個人的な快適追求にとどまるものが多い。

営業第二は比較的高齢者が多く、持病などで通院や薬剤服用中の者が多い。またこれまでにも深夜病状悪化で救急車要請した事例も発生している。職場での長時間拘束中には死傷病を含めて病状悪化、発症の可能性は十分にありうる。その緊急の対応方は、本当に私たちの周りに備わっているといえるのだろうか。前号でとりあげた「半休」問題では、業務優先で就業規則までし意的に運用しようとする管理者のいることを物語っている。

32歳の若者の職場での突然の死を、労組は「世話役」活動で済ませ、管理者は誰一人として哀悼も注意喚起の一言すらなく、以前とまったく変わらぬ業務成績や数値ばかりが問題にされている。私たちは同じ働く仲間を失うということに対し、いったいどれほど無力なのか。

一寸五部

九州に帰省の折東関東大震災の認識の違いに多少驚かされた。関東ではやはり未だに被災の状況が身近にそして深刻に感じられるのだが、九州ではもう三日目にはニュースに飽きてしまったというのだ。おそらく物資や電力の不足を心配しての買占めなども皆無だったのではないか。人はやはり身近に事件や災害が起こらなければ、それを親身に、そして深刻に受けとめられないのかもしれない。そしてそのような油断こそが今回の犠牲者の多さだったのではないか。油断と見込みの甘さは、まさしく人災の原因である。政治がこのことを十分に踏まえ、社会の構造をして自然災害を最小のものに変えなければならない。